
君が笑うとき

イヴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君が笑うとき

【Nコード】
N9563X

【作者名】
イヴ

【あらすじ】
ある少年が下校中にある少女と出会い、ある気持ちが芽生える

出会い

僕が君と出会ったのは高校1年の春。
ようやく学校にも慣れてきた頃だった。

僕が初めて会ったとき、君は泣いていた。
それは僕が下校途中のことだった。

君は僕に気がつくと言って笑ってみせた。
僕に「大丈夫」というような顔をしてみせた。
でもその笑顔は誰がどうみたって
本当の笑顔じゃない・・・つくり笑いで
それでも必死に君は笑ってた。

そして僕はこう思うようになった。

そんな君の本当の笑顔を見たいと・・・

それがこの気持ちの始まりだった・・・

出会い（後書き）

文がちょいちょいおかしいですが読んでくれてありがとうございます

再び

「坂口優斗。秋中。よろしく！」

単語だけを並べた自己紹介

でもこれが意外と評判がよくクラスで少し笑い声が聞こえる
前のやつも

「お前おもしれーな！よろしくな」
って言ってきたりして

このクラスは上手くやっていけそうだ

それにしても昨日のあの子のことが気になる
多分一緒の高校だと思っただが・・・

やっと1時間目・・・自己紹介が終わり
僕はクラスを出た。

そのとき隣のクラスで誰かが何かにぶつかった音がした
少しのぞいてみるとそこで昨日のあの子が転んでいた

「もー愛莉何やってんのー」

「ホント齋藤さんって天然」

その齋藤愛莉と呼ばれた子は友達であろう女の子たちに囲まれて笑
われていた

その子は昨日泣いていたあの子だった

もちろんその子自身も笑っていてとても楽しそうだった
昨日一人で泣いていたとはとうてい思えなかった

すると笑っていた齋藤愛莉はこちらを向いた

目が合ってしまった。思った以上に大きく丸い瞳

すぐクラスに戻ろうとしたのに齋藤愛莉は僕の方に来て

「昨日の人だよね？よろしく！名前なんて言うの？」

と笑顔で言った。僕は

「坂口優斗です。よろしく」

と思わず敬語を使ってしまった。

すると笑って

「敬語。うちは齋藤愛莉！またね！」

と言ってクラスに戻っていった

2時間目・・・学校説明 だった

だが僕はその間ずっと齋藤愛莉について考えていた。

なぜ昨日泣いていたのだろうか

そして今日見せた笑顔は本物なのだろうか

齋藤愛莉はどんな子なのだろうか・・・

再び（後書き）

gggg文ですみません……
ありがちですみません……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9563x/>

君が笑うとき

2011年11月12日21時22分発行